

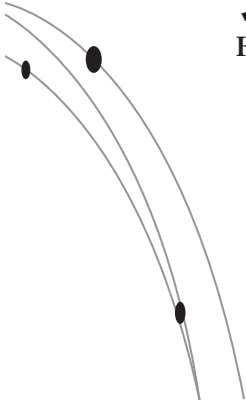
連載

フィールド・アイ Field Eye

広州から——②

暨南大学 丸山 士行

Shiko Maruyama



中国に暮らす

今回は中国に職を求めた経緯と待遇について書いた。今回は大学人として体験した中国の暮らしの話を披露しよう。等身大の中国をご存じない読者もいるだろうし、中国への研究訪問を検討する方には参考になるかもしれない。

海外暮らしでまず気になるのは食事だろうか。食事が合わないと長期滞在は辛い。当たり前だが基本は中華だ。中華好きであれば問題ない。日本の町中華とは大分違うがレベルは高い。ただ、当たり前といえば当たり前なのだが、中国には中華料理屋はない。こちらの友人に普段、どんなものを食べるのが好きか聞いた時に返ってきた答えが「広東料理、湖南料理、それから日本料理と韓国焼き肉、ウェスタンも好きね」という感じだ。非中国人が中華料理と呼んでいるものは、中国人にとって全く別ジャンルである広東料理や四川料理などの総称なのだ。逆に、イタリアンやフレンチは十把一絡げに西餐と呼ばれる。ハンバーガーも同じジャンル。中国での欧米食は歴史が浅く、私より若い世代でも田舎出身だと大学に入るまでハンバーガーやピザは食べたことも聞いたこともなかったという人もいる。そんなわけで、広州でさえ「中華」以外の選択肢はまだまだ発展途上だ。日本食は人気だが質はまちまち。タイやインド料理はシドニーの方がレベルが高かった。食は広州に在り、というのは中華料理の話である。ただし、広州ほどの大都市となると、超高級でハイレベルの日本食やイタリアンもあるし、在住日本人がずっと多い上海は街中の日本食のレベルもかなり上とのことである。

経済発展が急速に進み、生活の利便性も大きく上がってきている。町中にコンビニが溢れ、都会では地下鉄網が次々に整備され、都市間高速鉄道の充実ぶりにも驚かされた。学生時代に何泊もかけて北京から成都まで旅したことがあったがそんな旅情は風前の灯火だ。ITの社会実装には特に目を見張る。配車アプリ、出前アプリ、オンラインショッピングは慣れると手放せない。極めつけはオンライン決済だ。どんなサービスでもスマホで手数料無しで決済できる。事前にチャージしておいても良いし、銀行引き落としもできる。自分は財布を持ち歩いているが、中の現金は今年一度も触れていない。飲食時など友人とのお金のやり取りもスマホ決済。街頭の物乞いに施すときでさえQRコードをスキャンして決済という笑い話もあながち嘘ではない。

物乞いが話に出たところで中国の治安であるが、総じてとても良い。貧富の差が大きい国だが、社会主義国のご多分に漏れず社会の底辺での公的扶助が行き届いていて、他のアジア諸国に見られるようなスラムや目を覆いたくなるような貧困は少ない。物乞いやホームレスは極めてまれ。行政が末端まで行き届いていて重犯罪は少なくシドニーの時よりも安心して暮らせている。

ネット環境はよく聞かれる話題だ。メディア統制は事実で、中央政府の強固なファイアウォールがあり（Great Wallをもじり「万里の防火長城」）、Google関連のサービス（YouTubeを含む）、Facebook、インスタグラム、Twitter、日本のメディアなど軒並み利用できない。しかしいくらでも回避策はあるもので、VPNを使ってアクセス可能である。若干鬱陶しいのは事実だが、根本的に困るようなことにはなったことがない。

言葉の問題も避けて通れないところか。中国でも英語教育熱は非常に高く、小学校低学年から英語の授業が始まる。広州は中国第4の都市で非常に国際的だとされる。しかしそれでも英語の通用度は非常に低いといわざるを得ない。IESRの教授陣は大多数が海外PhDであり、秘書さんたちも英語ができるので、英語だけで問題なくいける。授業はすべて英語だし、セミナーも基本英語。しかし、IESRを一步外に出るとそこは別世界。キャンパス内のスーパー、レストラン、銀行すべてダメ。近くのシェラトン系列ホテルのレセプションにおいてすら、英語を話せる人を頼んだ

ら、スマホの翻訳アプリの達人が嬉々として出てきた。

そんなわけで、中国語の学習をするのも一興である。幸い、IESRが我々家族全員に中国語チューターをつけてくれた。自分は学部時代に中国語を第二外国語でやっていたのが少しプラスになった。そもそも中国語習得に日本人は大きなアドバンテージがある。漢字には馴染みがあるし、自分の肌感覚でいうと日本人は学習前からすでに2000語くらいは知っているのではなかろうか。書き言葉はわかることが多い。発音と聞き取りは難しいが、漢字の音読みの知識はやはり有利だ。語学学校に通っている暇はないわけだが、少なくとも自分は週数時間の勉強を息抜きに楽しんでいて、レストランや買い物では不自由しないくらいにはなった。他方で、同僚の韓国人の若手には、中国語習得は早々に諦め時間を使わない方針を貫いている猛者もいる。彼は独身で、アパートとオフィスとジムと学食からなる規則正しい学者生活を確立して元気にやっていて、そういう選択肢も十分可能である。しかしながら子連れとなると話は別で、言葉の重要性が一気に上がろう。残りの紙面では子ども関連の話をしてみたい。

うちの娘はまもなく9歳になるが、最初から現地校にしよう決めていた。当初は多くの人にインターを勧められた。「教育の内容も設備も質が高い」「すべて英語で勉強できる」「現地校では子どもは何もわからずかわいそうだ」といった理由だ。しかし自分としては、せっかく中国に来たのだから現地の子と友達になり現地のことを学ばなければ勿体ないという思いであった。このアイデアは自分のオリジナルではない。ミシガン大の経済学者のEdward Norton先生がサバティカルで東京に来て息子さんを現地校に入れ、1年後には友達もでき地下鉄の駅名を沢山憶えて帰っていった、という話は深く印象に残っていた。また、大阪大学の小原美紀先生がオランダでサバティカルをされて、息子さんがかなりオランダ語をできるようになって帰ったというのにも大いに触発された。実際、我々のこの試みは大当たりだった。子どもの語学力というのは目覚ましく、来て半年後には中国人の親友を何人もつくり中国語で楽しく遊んでいるという有様だ。彼女のクラスは四十数人と大人数だが、すべて中国人（台湾人やアメリカ籍の中国人を含む）。そんな中、中国語が全くできない子が突如加わったインパク

トは大きかったらしく、みんなとても良くしてくれた。多くの子と一緒に遊ぼうと言ってくれた。親友を連れてきて我が家でお泊まり会をやったこともあった。クラスの過半数がスマートウォッチを持っている、我が家も買うはめになったのだが娘の現在地が確認できるのは便利である。最近は夕食時など電話がかかってきて、宿題の範囲を教えろというのに中国語で答えてあげたりしている。頼もしい娘である。

親バカになってしまったが、小学校低学年のうちにこういう体験をするのは非常にお勧めである。将来日本に帰り、言葉はすぐに忘れてしまうと思うが、異国で過ごした体験は自分の一部として残るのではないかと期待している。

中国は教育熱がすごいとのことで宿題の量を心配していたが、我々が着いた年に中央政府が行き過ぎた教育負担を抑制しようと塾を規制し宿題を減らす中国版ゆとり政策（双減政策）を打ち出したおかげで、宿題は皆無だった。3年生になり宿題が少し出るようになったが、うちのクラスは大した量ではなく、教育熱心な家はこれでは将来困るという事で、独自に別途、教材をあたえているそうだ。塾も家庭教師も禁止だが、秘密で家庭教師を頼んでいる家庭も多い。

宿題は減って塾が看板を下ろしても熾烈な学歴社会の構造は何ら変わらない。他方で、多数の雇用が突如失われたという分析結果も耳にした。何のための政策か。良い進学校のある学区は不動産価格が顕著に高い。進学目的の加点のため音楽やスポーツなど習い事をやっているというのも聞いた。外国籍だと有利なので、高額を払って名もなき小国の国籍を子どもに買い与えた、という話まで伝え聞いた。街では学習塾こそ規制されてしまったが、習い事教室は百花繚乱、学費も安くないが、ピアノ・ダンス・英会話・絵画など、どの子も多くの習い事を抱えてゆとりがなさそうにしているのはシドニーと対照的である。一人っ子政策が解除され二人目、三人目が持てる時代になったが、二人目を躊躇する親が多いのも合点がいく。

まるやま・しこう 2007年にノースウェスタン大学にてPh.D.（経済学）取得。オーストラリアでの教職を経て、2021年より暨南大学（キナンダイガク、Jinan University）経済与社会研究院（IESR）教授。最近の主な論文に“Why Are Women Slimmer Than Men in Developed Countries?”（2018年）。専門は医療・健康経済学、人口経済学を中心とする応用ミクロ経済学。